

王衆おほきみたちみな来りて饗あへを受けて喜びたまふ。其の食先さきより倍まさる。王衆讚ほ称めてのたまはく「富める王おほきみなり。然しかうあらずは、何なにすれぞ貧しくして敢あへて能よくする。余あまり溢みち飽あき盈みちて、我が先に設けたるより尤すぐれたり。舞歌まひうたの奇異あやしきこと鈞きん天てんの楽がくの如ごとし」とのたまふ。或あるいは衣ころもを脱ぬきて与へ、或あるいは裳もを脱ぬきて与へ、或あるいは銭ぜにと絹きぬと布ぬのと綿わたとの等ごときを送りたまふ。悦よろこびの望ねがひに勝たへずして、衣と裳ささげもとを捧ささげ持ちて乳母きに著きせたまふ。然しかうして後に堂いへに参り、尊たふとき像みかたを拜まむまむとしたまふ。乳母一九に著きせたる衣と裳と、其の天女の像かがふに被かる。疑うひて往ゆき、乳母二〇に問たひたまへば、答こたへてまうさく「知らず」とまうす。定めて知る、菩薩ぼさつ感かんんして賜たまふ所ところなり、と。因これによりて大おほきに財たからに富あみ、貧窮まづしき愁うれへを免まぬかる。是これ奇異あやしき事ことなり。

法華經ほふくゑきやうを写たてまつつ奉くり供養くやうするに因よりて母めの女牛うじと作なりし

因たねを顕あらはす縁ことのもと 第十五

高橋たかはし連東人むらじあづまひとは、伊賀国山田郡いがのくにやまたのこほりはみしろのさと噉代里おほきの人ひとなり。大おほきに富たからみて財饒ゆたかなり。亡しにたる母おほきの奉おほき為ために法華經ほふくゑきやうを写たてまつて盟ちかひて曰まうさく「我わがが願ねがひに縁よしあ有ある師しを請むかへ、

れた食物よりもすぐれている。  
四 富裕な女王でないならば、貧しくてこのよ  
うなことができるのはどうしてだろうか。  
五 この女王の宴において歌舞されたという記  
述はない。  
六 天上の音楽。文選・二・西京賦・李善注はじめ  
諸書にみえる。  
七 二十二人の女王のうちのある一人は。  
八 類似した説話展開の中巻二十四縁は、この  
あたりに「急々に還り去ぬ」とある。乳母は帰っ  
ていった、という記述は本説話に欠けている。  
九 「然後」の前後に多くの時間経過が考えられる例  
に、上巻三縁がある。  
一〇 衣と裳とは、吉祥天女の霊験の証拠となっ  
ている。  
一一 「大吉祥天女菩薩摩訶薩（大吉祥天女十二名  
号経）とあるように、吉祥天女は菩薩とされる  
ことがあった。覚禅鈔には「菩薩」の呼称が散見  
するが、本説話の時代としては珍しい呼称。  
一二 「若聚落空沢及僧住処、随所求者、皆令  
田満、金銀財宝牛羊穀麦飲食衣服、皆得随  
心受諸快樂」(金光明最勝王経・大吉祥天女増長  
財物品)。大吉祥天女十二名号経には「能除一  
切貧窮業障、獲得豊饒財宝富貴」とある。後  
代の覚禅鈔・一〇九・吉祥天は「大吉祥天女、利  
生第一、感応速疾也」としている。

第十五縁 三宝絵・法十一に引用。三宝絵よ  
り本朝法華験記・下・一〇六に書承。今昔物語  
集・十二ノ二十五に書承。

三 未詳。本説話以外に所伝をみない。  
三 三重県上野市喰代(ほろ)あたり。  
三 亡母の追善をおこなう、という東人の願い  
に關係のある僧。

濟度されむと欲ふ」とまうして、法会を厳り訖り、明日に供らむとして使に  
 誠めて曰はく「第一に値はむを我が縁ある師とし、法を修ふ状有らば過さず  
 かならず請へよ」といふ。其の使願に随ひて、門を出で試に往きて、同じき郡  
 の御谷の里に至る。乞ふ者有るを見る。鉢囊を肘に懸け、酒に酔ひて路に臥す。  
 姓名詳ならず。伎戯人有りて、髪を剃り繩を懸け、以ちて袈裟とす。然らず  
 といへどもなほかつて覺知らず。使見て起し礼み、勸請へて家に帰る。願主  
 見て、信ふ心もちて敬ひ礼む。一日一夜に家の内に隠し居ゑて、頓に法の服  
 を作り、之れを以ちて施し奉る。爰に乞ふ者問ひていはく「所以は何に」と  
 いふ。答へて曰はく「請ひて法花經を講かしめむ」といふ。乞ふ者「我れ学ぶ  
 る所無し。ただし般若陀羅尼を誦持ち、食を乞ひて命を活く」といふ。願主な  
 ほ請ふ。乞ふ者思ひ議りて「竊に逃ぐるに如かず」とおもふ。兼ねて逃げむこ  
 とを心知りて人を副へて守らしむ。彼の夜に請へたる師夢に見らく「赤き牝  
 来至りて告げて言はく「我れは此の家長公の母なり。是の家の牛の中に赤き  
 牝牛有り。其の児は吾れなり。我れ昔先の世に子の物を偷用き。所以に今牛の  
 身を受けて其の債を償ふなり。明日我が為に大乘を説かむとする師なり。故  
 に貴びて慙に告げ知らすなり。虚実を知らむと欲はば、法を説く堂の裏に我

一 亡母が迷いの世界を脱して淨域に渡される。  
 二 三重県阿山郡大山田村三谷あたり。  
 三 僧とも沙弥ともされていないことに注意すべきであろう。

四 鉢をいれるための袋。僧の鉢囊は、鉢をいれて口をくくり、鉢が腋下になるように帯で肩からつるした。衣をいれることもあった。  
 五 たわむれの行動をする人。演劇、笑芸、奇術などを業とする人か。

六 本説話の乞者は僧でも沙弥でもなかった。酔つて臥している間に、他人のたわむれによって僧形にされたのである。釈迦が阿難に命じて一醉婆羅門を僧形になさしめた、という大智度論・十二の説話にかよふところがある。繩を袈裟とした、という記述は、後代の輪袈裟や種子袈裟のような形態の袈裟を連想させる。  
 七 袈裟。

八 理由は何か。原文「所以者何」。仏典語。たとえば妙法蓮華經・方便品にみえる。

九 般若心經の末尾の陀羅尼か。陀羅尼集經・三には、般若無尽藏陀羅尼、大般若波羅蜜多陀羅尼、般若波羅蜜多聰明陀羅尼、般若大心陀羅尼(般若心經の陀羅尼と同文)、般若小心陀羅尼(同名のもの二種)、般若心陀羅尼、般若聞持不忘陀羅尼、を収録。

一〇 こつそり逃げるのが最高だ。

二 願主の東人は乞者が逃げることをあらかじめ知つて。

三 上巻十縁。

三 原文「其児」。赤牝牛が母なのであり、赤牝牛の子が母なのではない。「児」は女を示し、本説話では赤牝牛をさす。接尾辞としての「児」にはさまざまの用法があるが、「其」に接続した例はなく、本説話の「児」は接尾辞ではない。

が為に座を敷け。我れ上り居む」といふ」とみる。請へたる師夢より驚き醒め、心の内に大に怪ぶ。明朝に講座に登りて言はく「我れ覚る所無し。願主の心に随ひ、故に此の座に登る。ただし夢の悟有り」といひて、具に夢の状を陳ぶ。檀主聞きて起ち、座を敷きて牝を喚ぶ。牝座に伏す。是に檀主大に哭きて言はく「実に我が母なり。我れかつて知らず。今我れ免し奉る」といふ。牛聞きて大に息く。法事訖りて後に其の牛すなはち死ぬ。法会の衆ことごとくみな号哭き、堂の庭に響く。往古より已後斯の奇しきに過ぎたるはなし。更に其の母の為に重ねて功德を修る。諒に知る、願主の母の恩を顧ることの至りて深き信と、乞ふ者の神しき呪を誦むことの積みたる功の驗なり、と。

布施せざると生を放つとに依りて現に善と悪との報を得る縁 第十六

聖武天皇の御代に、讃岐国香川郡坂田里に、一の富める人有り。夫妻同じき姓にして綾君なり。隣に耆と嫗と有り。おのおの居りて鰥と寡となり。かつて子息無く、極めて窮しく裸衣にして、命を活くること能はず。綾君の家を

一 法華経の異名として用いられている。  
二 同様の表現は上巻十縁にも存した。  
三 原文「上居」。下文には「登此座」とみえる。  
四 一段高い座が設定されている。中巻十九縁の優婆夷の「床」のようなものであろう。  
五 夢によつて不思議な世界、神仏の世界が示されたもの。  
六 檀越に同じ。施主。東人をさす。  
七 「めうじ」の表記を「女牛」「牝」「牝牛」「牝」と変化させている。

三 より高い地位の存在(たとえば、人)への転生を暗示する。  
二 上文にみえる般若陀羅尼。

第十六縁 善業と悪業についての現報説話。  
今昔物語集・二十ノ十七に書承。

三 香川県高松市。  
三 この夫婦は未詳。本説話以外に所伝をみない。  
二 耆と嫗とは同居して居るのではない。綾君のたとえば右隣に耆が左隣に嫗が、というように両隣に住んでいるのである。戸令によれば「耆」は六十六歳以上。  
一 妻の無い男。鰥夫。令集解・戸令では六十一歳以上。  
二 夫の無い女。寡婦。令集解・戸令では五十歳以上。耆と嫗とが夫婦でないことが示されている。  
三 中村宗彦の説では、わずかに身を隠す薄物ひとつを着けた状態。